

大きな森の小さな家

米重 文樹

モスクワから3等の郊外電車に乗って南西へ3時間半、カルーガ州の州都であるカルーガという町に着く。駅から歩いて3・40分、オカ川に面した高台に「宇宙博物館」というのがあって、有人人工衛星第1号（1961年）を打ち上げたロケット『ヴァストーク1号』の実物大の（おそらく）模型が、森の点在する中部ロシア平原が一望できる川岸にそびえ立っている。この博物館は、ロシアの宇宙工学の祖コンスタンチン・ツィオルコフスキイ（1857 - 1935）にちなんだもので、表面の焼け焦げた小さな人工衛星なども展示されていてなかなかおもしろい。博物館の裏手の庭から降りて木造の家並を抜けると、静かな日溜りの一角にツィオルコフスキイが住んでいた家があって、そのまま博物館になっている。宇宙飛行に関して彼が描いた理論的アイディアのメモ・惑星間飛行図などが展示してあって、これなどを見ているとこういう人は「宇宙人」にちがいないという気がするが、彼自身仕事部屋（屋根裏）に通じる小さなドアを「宇宙への扉」と呼んでいたとのことである（ちなみに、彼は昼間は中学で数学と物理を教えていた。彼の著作はほとんどが地元カルーガで出版されたものである）。

ところで、この家の中の各部屋は実にこじんまりとしたもので、ツィオルコフスキイの寝起きしていたベッドを見ると、これがまた可愛いベッドで、そう言えば、レーニンの故郷（ヴォルガ川中流に位置するウリヤノフスク）にあるレーニンの家博物館の中も同じ感じの小さな部屋に小さなベッドだった。小さなベッドと言え、新潟から直行便でハバロフスクに着いた日本人旅行者がよく泊まるインツーリストのホテルのベッドも可愛いベッドで、私のような小男でもいささか寝にくいくらいで、ロシア人はどうやって寝ているんだろうと思われた方も少なくないであろう（当然であるが、横向きで足を縮めて寝るしかない。余談であるが、ロシアではソファをそのままベッド代わりに使う人が結構多い）。こじんまりした

家、こじんまりした部屋、こじんまりしたベッド、あれだけ広い国で樹もいくらでもあるところだけに不思議な気がするが、これは、周囲の空間が広々していないと逆に落ち着かないというところと関連がありそう（田舎の村落配置が伝統的にそうであった）。「広々とした空間」をロシア語でプラスツールと言うが、これは「何ものにも邪魔されることのない自由」という概念と一体化した言葉である。

この「こじんまりした」家とかベッドは、通常の単語から派生した「指小・愛称形」という造語で表現される。例えば家であれば「ドーム」に対して「ドームク」、ベッドであれば「クラヴァーチ」に対して「クラヴァートカ」など、身近な事物に関して日常生活でよく使われ、人の名前の「愛称形」が友だち、夫婦、親子などでの呼び掛けとして、年齢を問わず幾つになっても使われるのが普通の世界であるのと相呼応している。

この事物についての「愛称形」のニュアンスはなかなか感得しがたいものであるが、いずれも、それが用いられる場面とか互いの人間関係の中で始めて生きるもので（「広々とした空間」の中でこそその「小さな家」、家だけを見て大きいだの小さいだの言っているわけではない。最後にトルストイの民話で『3匹の熊』（お父さんとお母さんと子熊）が住む森の中の家は「ドーム」はなく「ドームク」、すなわち、大きな森の小さな（自分たちの）家と言うことになる。